

創られたドイツ宗教改革

——現代史的考察——

踊 共 二

はじめに

歴史研究は数百年前の事件や人物を扱う場合にも現代史的な考察を必要とする。数世紀にわたって繰り返し議論の対象とされてきた歴史的事象には、しばしばある時代の価値観が新たに投影され、史実との乖離が生じているからである。歴史の教科書に掲載され、記念日や記念行事が存在するような大事件や大人物の場合、とくに注意が必要である。記録や記念の行為は、たとえ公的なものであっても、当該の事件の実像や全体像の価値自由な再確認を意図しているとはかぎらない。特定の立場や信条を守り、また広めることを目的としている場合もある。マルティン・ルターのドイツ宗教改革は、その顕著な例である。ドイツ宗教改革は昨年、二〇一七年に五百周年を迎え、現地では巨額の公費が投じられて多種多様な記念行事が催された。全体としては伝統的な宗教改革の歴史像の再生を試みる傾向が強

かったが、新しい理解を積極的に提唱する人たちもいた。本稿の目的は、ドイツでの主要な行事とりわけ歴史関係の企画展を手がかりに、それらと新しい研究の動向をつきあわせながら、ルターとドイツ宗教改革および宗教改革後の世界に関する歴史研究の問題点と課題を示すことにある。

一、百年ごとの記念祭

ドイツ宗教改革の歴史像は、その記念日と記念企画——とりわけ百年ごとの大きな事業——が繰り返されるなかで創られ、受け継がれてきた。その最初の舞台はルターが改革の狼煙をあげたザクセンの都市ヴィッテンベルクである。この地のルター派教会は一六一七年三月、ルターが「九五箇条の論題」を発表して百年たつその年を「ルターの聖年 jubileus Lutheranus」と呼び、一〇月三十一日に祝賀行事を行う許可をドレスデンにあるザクセン選帝侯領の中央宗務局に求め、承認を受けた。他の地域のルター派教会もこれにならった。しかし「聖年」とは、そもそもカトリック教会が五〇年あるいは二五年に一度と定めていた「罪の赦し」の年の名称であり、信徒たちに全贖宥（大赦）を与える機会であった。¹ ルター派教会があえてこの言葉を選んだのは、カトリック教会に対する強い対抗意識ゆえである。ルター派の指導者たちは、人間の善行ではなく神の恩寵および恩寵への応答としての信仰だけが罪の赦しと魂の救済をもたらすという宗教改革者の教えの百周年こそ「聖年」の名にふさわしいと宣言したのであった。カトリック教会にとってそれは挑発であり、冒瀆であった。カトリック教会は対抗措置として、本来は一六二五年のはずの次の聖年を一六一七年に開始すると宣言した。²

ドイツ宗教改革百周年は三十年戦争の前夜であり、ヨーロッパでは宗教的緊張が高まっていた。ここで注目したい

のは、ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルク一世がドイツのルター派地域においてひろく祝賀行事が行われることを望み、それまで彼と対立してきたカルヴァン派のファルツ選帝侯フリードリヒ五世もプロテスタントの共通の根を強調して記念祭を計画した事実である。こうした君主たちの力によって宗教改革記念の祝賀ムードはドイツ各地のプロテスタント地域に波及し、後々の「国民的行事」の基礎が築かれた。ただしプロテスタント教会人にとって百周年記念の焦点はいまだカトリック勢力との対決にあり、ドイツ（人）の一致や団結は二の次であった。なおこの百周年の段階では、ルターが勇ましくハンマーをふりかざしてヴィッテンベルクの城教会に「九五箇条」を打ちつける図像は存在しなかった。一七世紀初頭にドレスデンで成立したらしい「フリードリヒ賢侯の夢」と題する説話を図像化した銅版画があるだけである。この説話は、煉獄の魂の救いのためには何が必要か、思い悩みながら床に伏した賢侯の夢のなかで、使徒ペテロの實の息子がヴィッテンベルクの城教会の扉に羽根ペンを使って何かを大きな文字で書きつけたというものである。銅版画の作者はライプツィヒの画家コンラート・グレーレで、製作年は一六一七年である。画中の「使徒ペテロの實の息子」は修道服を身にまとったルターである。ルターは「神の使い」としてイメージされており、人間的な意志の力や勇敢さは表現されていない。ともあれ、このタイプの図像が大衆的な人気を博した形跡はない。^③

一七一七年の宗教改革二百周年は、あろうことかザクセン選帝侯がその二〇年前にカトリックに改宗していたため、控え目にならざるをえなかった。「九五箇条」の掲出をドラマチックに描く芸術家もいなかった。ただし一七世紀末にニュルンベルクの出版業者・銅版画家クリストフ・ヴァイゲルが「世界史図説」という書物のなかに「九五箇条」の掲出場面を描いた小作品を掲載していた。この銅版画には「聖なる改革の始まり Reformationis sacrae initia」というキャプションがついている。ただし「九五箇条」を掲出しているのはルターの助手らしき人物であり、ルター自身は教会の前を歩く人々に顔を向けて手招きしている。ヴァイゲル以後、「九五箇条」の掲出の図案は増えていくが、

一七一七年の宗教改革二百周年記念のさいにはまだいくつかの記念コインに使われていただけであり、注目度は高くない。もつとも、ルター自身がハンマーを持つデザインが出現したのはこの年であるから、ある種の発展はみられる。しかしそれでも、宗教改革的行為をシンボリックに描いた画像としては、ルターが一五二〇年に教皇の破門予告状を学生たちと一緒に焼き払う場面や、一五二一年にヴォルムスの帝国議会会で「我ここに立つ」の名言とともに自説の撤回を拒む場面が好まれた。それらは教皇も皇帝も恐れることなく断固として改革を推進していた時期のルターを描いたものである。⁽⁴⁾

ところでルターは一八世紀後半以降、ユストゥス・メーザーやレッシング、ヘルダー、ゲーテなどによって民衆を古い迷信と庄政から解放する「自由」の推進者として讃えられるようになっていた。そうしたなか、教会の権威と悪弊を批判する「九五箇条」の掲出には啓蒙のマニフェストの性格が付与され、イギリスやアメリカにもルターを評価する動きが広がった。この時代にはカトリック世界にもルターの歴史的役割を認める識者たちが登場する。かくして「九五箇条」の掲出には新たな意味が加わり、一九世紀を迎えるのである。⁽⁵⁾

一八一七年の三百周年記念祭はドイツ宗教改革の「政治化」を加速化させ、ナショナルヒーローとしてのルター像を確立させる契機になる。ヨーロッパの諸国民がナポレオン軍を撃破したライプツィヒの戦いの記念日（一〇月一六〜一九日）から宗教改革記念日にかけて、ブルシェンシャフトの若者たちがルターゆかりのヴァルトブルク城に結集した。彼らは祖国ドイツの統一と自由主義的な改革を求め、讚美歌「いざ、もろびと神に感謝せよ」を熱唱した。この学生たちはルターを自由の唱道者にして「ドイツ」の英雄とみなし、多くの人々に大きな感銘を与えた。⁽⁶⁾

そのころまでにルターの画像はバロックと古典主義の両方から影響を受け、画家たちは新種の聖人崇敬を連想させる表現さえ用いるようになっていた。その典型例は、光背を伴うルターにヴィーナスが棕櫚の枝（勝利のシンボル）

を与える祭壇画風の連画「ルターの栄光」（一八〇六年）である。作者ヨハン・E・フンメルはベルリンで活躍した画家で、プロイセン芸術アカデミーに属していた。フンメルは「九五箇条の論題を掲出するルター」（一八〇六年、銅版画）も作成している。この作品のなかでは助手が梯子を使って「九五箇条」を教会の扉にハンマーで打ちつけ、ルターはそれを指さしながら、集まった人たちに注意を喚起している。不屈の意志をもった民衆の指導者としてのルターを印象づける図像である。⁷⁾

「九五箇条」の掲出を宗教改革開始の歴史的瞬間として強調する傾向は一八世紀から一九世紀にかけて生まれたのであり、「祖国ドイツ」の導き手としてのルター像も同じ時代に創られたのであった。ただし「九五箇条」にはまだプロテスタント的でない要素が多分にある。たとえばルターはローマ教皇の權威と教会法の有効性を認め、中世カトリック神学に掉さす「煉獄」の存在も前提条件として議論を展開しており、明らかにカトリック教会人（すなわちアウグスティヌス隠修士会の構成員にして神学教授）としてカトリック教会の内部的改革を求めているのだが、⁸⁾ 一九世紀にさかのぼる教科書的イメージを修正する力のある研究者はいない。「恩寵のみ」「信仰のみ」「聖書のみ」という宗教改革神学の開花はいわゆる「宗教改革三大文書」（一五二〇年）以後であるにもかかわらず、現在もなお、劇的かつ英雄的な行為（のひとつ）が宗教改革の始まりとされつつづけている。なおルターが聖書研究の過程で信仰による義認を確信したという「塔の体験」は「九五箇条」の掲出より前だとも後だともいわれている。年月日は不詳である。宗教改革はいつ始まったのか、厳密にいえば不明なのである。興味深いことに、世界的な事件としての宗教改革は「書齋の中」で始まったと表現する学者もいる。⁹⁾

二、ヴィッテンベルク——宗教改革の記憶の場

一八世紀から一九世紀にかけて、ドイツ宗教改革の震源地ヴィッテンベルクは大きな変化を被っていた。七年戦争中の一七五六年にプロイセンによって、一七六〇年にオーストリアによって攻略され、城教会は崩れて木製の古い扉も焼け落ちてしまった(当時ザクセン選帝侯はオーストリア側について参戦していた。選帝侯家は一七世紀の末、フリードリヒ・アウグスト二世の時代にポーランド王位を得るためにカトリックに改宗しており、ハプスブルク家と密接な関係をもつようになっていた)。その後一八一五年、またもプロイセン軍がやってくる。プロイセン王はナポレオンに追従した「ザクセン王」から領土の半分を奪ったのだが、ヴィッテンベルクはその領土に含まれていた。こうしてヴィッテンベルクはベルリンと密接に結びつき、プロイセンの歴史を背負うことになる。一八五三年、『アンクルトムの小屋』で有名なアメリカのストー夫人がドイツ史の「自由」の息吹を感じとるためにヴィッテンベルクを訪れ、ルターが一五七一年一〇月三一日に「ハンマーと釘を手に」姿を現した(はずの)城教会の扉の前まで行くが、その荒れ果てたようすに驚き、いったいどうしてドイツ人は「プロテスタントのメッカ」をこんなに薄汚いままにし、しておくのかとため息をついた。¹⁰⁾

ただしそのころ、すでにプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世によって修築計画が練られていた。そして一八五八年、建築家フェルディナント・フォン・クヴァストの手で城教会の扉は「九五箇条」を浮き彫りにしたプロンズ製の重厚なドアにつくりかえられ、ティンパヌムには十字架のキリストを拜むルターとメラニヒトンの姿が描かれた。こちらはアウグスト・クレーバーというベルリンの画家の作品である。新しい扉には、その他にも訪問者の視線を集める装飾がある。それは建築者フリードリヒ・ヴィルヘルム四世の名を刻んだ梁(まぐさ石)の碑文とその中

中央にとりつけられたプロイセンの鷲の紋章である。アーチの上方に据えられたヴェツティン家の宗教改革支援者、ザクセン選帝侯フリードリヒ三世（左）とその後継者ヨハン（右）の石像も目をひく（写真1）。二人の選帝侯は抜き身の剣を携え、いまやホーエンツォレルン家のものになった城教会の入口を守っているかのようである。¹⁾

ところでプロイセンのホーエンツォレルン家は、一七世紀前半にカルヴァン派に改宗していたが、

一九世紀にはルター派とカルヴァン派の合同を進めており、ルターをドイツの福音主義教会の創始者として高く評価していた。ルターは宗派の違いを超えたドイツの英雄であり、宗教改革はドイツ人の精神を高めた偉大な運動であった。ヴィッテンベルクのマルクト広場にある堂々たるルター像も、プロイセン国家の遺産である。この像はフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の時代、宗教改革三百周年を記念して建立されたものである（写真2）。その完成は一八二一年のことであり、作者はベルリンの彫刻家ゴットフリート・シャドウである。こうしてヴィッテンベルクの都市空間は変容を遂げ、一九世紀の時代精神を映し出すようになったのである。もちろんそれは単色ではなく、英雄を求める歴史主義、中世に憧れるロマン主義、調和と写実性を重んじる古典主義の精神が入り混じったものであった。付言すれば「ルターハウス」が修築をへて絵画や遺物の展示機能をもつようになったのは一八八三年、ルター誕生四〇〇年記念の年である。この出来事はルターの故郷アイスレーベンにも影響を及ぼし、一八六〇年代に再築されていた

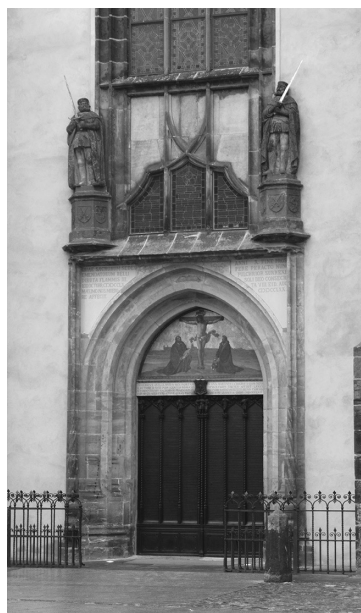


写真1 ヴィッテンベルク。城教会の九五箇条の扉（筆者撮影）



写真2 ヴィッテンベルク。マルクト広場のルター像（筆者撮影）

「ルター臨終の家」に一五四六年の葬儀のときにルターの棺を覆ったこげ茶色の棺掛け（ルター家の子孫が提供）や古びたベッド（模造品）、肖像画、各種の初版本などが展示された。やがて町の広場にはルター像が据えられ、歴史的世界への人々の関心をかきたてた。なおルター臨終の家はルター逝去のすぐあとから巡礼地の様相を呈し、一六世紀後半の記録によれば信徒たちは臨終のベッドの破片を削りとり、記念品として、あるいは——俗信に従って——歯痛の治療薬として持ち帰っていたという。けつきよくそのベッドは、新たな聖人崇敬を懸念する当局によって一七〇七年に焼却され、臨終の家も改築の過程で忘れられることになる。それを復活させたのが一九世紀の新しい英雄礼賛の精神である。新しい臨終の家を訪れたのは「祖国ドイツ」の偉人に対する歴史的関心を抱く人たちであったと考えられるが、古い聖遺物崇敬の心性を残した敬虔なドイツ人も含まれていたであろう¹²⁾。

宗教改革三百周年以後、ドイツでは宗教改革の「ドイツ性」の自覚が急速に高まっていた。歴史家レオポルト・フォン・ランケも、宗教改革は「祖国の統一」と「信仰の刷新」という「ドイツ国民の意識から瞬時にも離れない念願」に由来すると述べ、改革の混乱も「強力な政権が同じ一般的精神に動かされ、また同じ方向にむかって動いてゆく」なら恐れ

るに足りない」と論じている。¹³しかし、このドイツ的な宗教改革史像はイギリスやアメリカでは普及しなかった。英米の歴史家たちは、ルターがふりかざしたハンマーの音に万人を解放する普遍的な「自由」の響きを聴きつづけ、これを世界史的事件として概説書や教科書にも記すようになっていた。¹⁴興味深いことに、日本人による早期の宗教改革研究には、英米の影響を受けて宗教的自由と市民的自由を連続的にとらえる立場とドイツ（ランケ）の影響を受けて権力者による上からの教会支配と信徒の統率を当然視する立場の二つがあった。¹⁵ただしランケは、ドイツ農民戦争を鎮圧する側に立ったルターを擁護しつつも、農民（最底辺の信徒層）を「国家を支えている根源的勢力」と呼び、その「どよめき」に歴史を変える力を認めていた。¹⁶

現代人がヴィッテンベルクで目の当たりにするのは宗教改革時代の景観そのものではない。それは一九世紀にプロイセンの国威発揚を目的として創られた演出空間であり、誇らしい歴史の記憶の場である。プロイセンが打ち出した方向性は、やがて統一後のドイツに受け継がれる。普仏戦争をへて成立した新しい帝国は、ドイツ宗教改革を精神的支柱とするプロテスタントの強国たろうとした。いまやヴィッテンベルクはドイツ国民の荘厳なる巡礼地となり、訪問者たちはそこで宗教改革のドイツ性を実感し、堪能することができた。

一八八三年、ルター生誕四百年の折には城教会の再修築が決まり、一八九二年（宗教改革三七五周年）に献堂式が挙行された。この催しには皇帝ヴィルヘルム二世が列席し、建築責任者が黄金の鍵を皇帝に、皇帝がこれを教会の代表者に引き渡す式典が執り行われた。会堂内には皇帝のための王座が設けられ、高所に飾られた帝国の鷲の像が式典を見守っていた。なおカトリックの臣民たちもこのプロテスタントの皇帝による統一と平和の恩恵に等しく与っていたから、宗教改革はドイツ国民全体のヘリテージと位置づけられた。¹⁷

三、二〇世紀の悲劇

一九一七年の宗教改革四百周年記念行事は国際的な規模で催される予定であり、そのための協議が数年前から熱心に行われていた。しかし第一次世界大戦がこの計画を不可能にし、式典や出版物は前世紀以上にドイツ色を強めることになった。一九一七年、神学者パウエル・アルトハウスはルターのドイツ性を断固として強調し、次のように論じている。「マルティン・ルターはどれほどドイツ人を愛していたことか。彼は同胞がラテン民族に抑圧され、搾取され、侮辱されてきたことに対してドイツ的な怒りを爆発させ、告発状を書いたのだ。ルターが現代に生きていたとして、確実なことがひとつある。それは彼が中立の立場をとるはずがないことだ。ルターはわが民族への神の賜物である。「・・・」重要なのはルター主義とドイツ性の一致なのだ」と。⁽¹⁸⁾ 同一年、ドレスデンの画家オスマー・シンドラーは、堅信礼の証明書のデザインとして、「九五箇条」を教会の扉にハンマーで打ちつけるルターの後ろ姿と悪魔（ドラゴン）を銃剣で突き刺すドイツ兵の姿をならべて描いた。ルターの宗教的闘争は、ついにドイツの戦争と結びつけられるにいたったのである。⁽¹⁹⁾

宗教改革のドイツ性に関する認識は、たとえばランケにも濃厚にみられた。そして第一次大戦の時代、そのドイツ性はカトリック信徒も包摂するようになり、宗教改革四百周年記念祭においては宗派對立の要素は消え去っていた。皇帝ヴィルヘルム二世は大戦の初期段階において、カトリック教徒もドイツ人であることを強調していた。⁽²⁰⁾ 一九一七年には神学者ハンス・フォン・シューベルトが「人間ルターは福音派だけでなく全ドイツ人のものであり、われわれの文化の一部である」と主張し、アルトハウスの主張を超教派的なものに仕立てあげた。⁽²¹⁾ この精神の延長上に、ナチス時代の「ドイツ的キリスト者」の理念と実践が生まれるのである。

ヒトラー内閣の誕生の年であると同時にルター生誕四五〇周年の年でもあった一九三三年、神学者ハンス・プロイスはルターとヒトラーを比較し、二人は「ドイツ民族の救済」という神の召命を受けている点で共通していると述べた。こうして教会の側からドイツ国民社会主義に宗教改革の完成の役割が与えられることになった。ナチスもルターを賛美した。ユリウス・シュトライヒャーはルターを反ユダヤ主義の先駆者と位置づけ、彼が残した反ユダヤ文書の出版と普及に努めた。こうして悲劇が始まる。⁽²²⁾

二〇世紀前半に生じた宗教改革の歴史像は、当然のことながら宗教改革そのものではない。それは過去の事実あるいは傾向の一部を強調ないし極大化することで創られた歴史である。第二次大戦後には旧東独において「初期市民革命」論が一世を風靡するが、それは歴史の「進歩」に対するルターの役割をそれまでとは違う形で描きなおすものであった。一方、西側では宗教改革の社会史への関心が高まり、実証史学の立場から「ルター神話」の数々を非神話化する傾向が強まった。そうしたなか、ついにルターによる「九五箇条」の掲出自体の史実性を否定する研究者たちが一九六〇年代に現れ、果てしない論争を引き起こした。カトリック史家エアヴィン・イザーローがその先駆けである。⁽²³⁾ 教会の扉にテーゼを掲出するのは大学に雇われた用務係の仕事であり、大学教授が自分でハンマーをふりまわすはずがない。しかもルター自身、掲出については何も語っていない。ルター自身による掲出説は、彼の後継者フィリップ・メランヒトンの述懐に依拠しているにすぎない。しかもハンマーへの言及はない。⁽²⁴⁾ しかしそうになると、一五一七年一〇月三十一日を宗教改革記念日とし、その日に周年記念の行事を催す意義は疑わしくなる。それでも、数世紀をへて創られ、継承されてきたドイツ宗教改革の歴史像の生命力は驚くほど強い。このことを確認するのが本稿の次の課題である。

四、宗教改革五百年をふりかえって

二〇〇八年から二〇一七年までの一〇年間、ドイツは「ルターの二〇年」という記念事業を展開してきた。投入された公費は二億五〇〇〇万ユーロであり、事業数は二〇一七年だけでも二四〇六件にのぼる。⁽²⁵⁾ ヴイッテンベルクでの記念礼拝にはメルケル首相もやってきた。カトリックの代表者も招かれ、和解と協調を印象づける式典が催された。歴史関係の大型企画として注目されるのは、最新の学術的研究を反映させた三つの「ナシヨナルエグジビション」であり、主催者の発表では合計で六〇万人が訪れた。⁽²⁶⁾ 企画名をあげれば、ヴァルトブルク城での「ルターとドイツ人」、ヴィッテンベルクでの「九五の宝と九五人のひとびと」、ベルリンでの「ルターエフエクト」である。以下、これらの展示会の内容を検討してみる。そのさいには首都や地方都市で行われた他の記念企画の内容との異同や、最新の歴史研究との関連にも言及し、三つの「国民的」ないし「国家的」な企画の特色を浮き彫りにしたい。

(1) ヴァルトブルク

ヴァルトブルクの特別展「ルターとドイツ人」は、中世後期から宗教改革までのドイツ史を概観するもので、近代についてはナポレオン戦争後の自由主義・国民主義とルター、ドイツ帝国とルター、ナチズムとルターの関わりなどに光をあてていた。「ドイツ人」ととってルターないし宗教改革とは何であったかを多面的に考える企画である。

ヴァルトブルク城は周知のように、ヴォルムス帝国議会で帝国追放刑を受けたルターが一五二一年から翌年にかけて過ごしたザクセン選帝侯の城である。ただし昔日の姿のままではなく、一九世紀後半に大規模に改修されている。これを指揮したのはザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公カール・アレクサンダーであり、彼はかつてルターをこ

の城にかくまったエルネスト系ヴェッティン家の末裔である。改修のさいには「宗教改革の部屋」が設けられた。それは重厚な歴史画を飾るギャラリーである。「ルターの部屋」も復元された。そこはルターが新約聖書をドイツ語に訳した場所であり、改修によって一六世紀の家具やタイルストーブが見学できるようになった。壁にはインクの跡がある。それはルターが「悪魔がそこにいる」と言っているインク壺を投げたときに付着したものとされる。すでに一九世紀から、訪問者たちが壁の一部や机の破片を——古い聖遺物崇敬の名残か、ツーリスト的な収集癖のいづれかにより——削りとって持ち去るようになり、壁はひどく傷んでいる。ともあれ改修後のヴァルトブルク城には訪問者が絶えなくなった。ヴィッテンベルクとならぶ国民的な巡礼地の誕生である。²⁷二〇一七年の特別展は、城内の歴史的空間と常設展示物、特別展示物を組み合わせて構成されており、全体としてみれば、一八世紀から一九世紀にかけて形成されたルター像を再生産し、これをドイツ人と外国からの訪問者たちにあらためて印象づけたといえる。

ところで、すでに述べたとおり、ルターは一八世紀後半以降、啓蒙思想の影響を受けた知識人たちによって「自由」の守り手にして「理性」の人、そして「進歩」の推進者とみなされるようになった。そうした知識人のうち、レッシングはザクセン出身者であり、ヘルダーは東プロイセン出身者であった。²⁸一七七六年、啓蒙専制君主の代表格であるフリードリヒ大王もルターを「祖国の解放者」と呼んで称賛している。ナポレオン戦争後、一八一七年のヴァルトブルク祭・宗教改革三百周年記念祭に集った学生たちも、すでに述べたようにルターを解放者とみなし、専制に反対して「自由」と「祖国」の統一を求めた。そこではリベリズムとナショナリズムの結合が起こっていた。城内に飾られているイエーナのブルシェンシャフトの旗はドイツ国旗の起源だともいわれる。²⁹この城は宗教改革だけでなくドイツ国家の歩みを記念する場所なのである。

以下、特徴的な展示物をいくつかみておこう。まずパウル・トゥーマンの絵画「聖書を翻訳するルター」（一八七二

年)である。修復された「ルターの部屋」の緑色のタイルストープを背景に、羽根ペンをもって執筆するルターの、学者然とした凛々しい姿が印象的な歴史画である。なおトゥーマンはプロイセン芸術アカデミーに属し、ベルリンで活躍した画家である。すでに言及したフンメル「ルターの栄光」も、目立つ場所に展示されていた。それ以上に注目を集めていたのは、フェルディナンド・パウウェルスの「ルターによる九五箇条の掲出」(二八七二年)である。ルターは人々にまっすぐ視線を向け、黒い鉄のハンマーで箇条書を指し示している。この作品は一九世紀の「九五箇条」画の傑作といわれる。改革者の強い意志、実行力、指導力を感じさせるこうした図像こそ、一般の人々に「九五箇条」の掲出が宗教改革開始の歴史的瞬間であったと確信させる媒体であった。なおパウウェルスは「宗教改革の部屋」のために合計七つの大作を描き、多くのドイツ人に感銘を与えたのだが、彼自身はドイツ人ではなく、ドレスデン芸術アカデミーに招かれて教鞭をとったアントウエルペン出身者である。⁽³⁰⁾

ヴァルトブルクの特別展の公式ガイドブックの結びの言葉は次のようなものである。「聖人、国民的英雄、国語の創造者、農民とユダヤ人の敵。ルターの評価とイメージは過去五百年間に創作された芸術作品と同じく



写真3 ヴァルトブルク城の中庭。夜のプロジェクションマッピング(筆者撮影)

らい多様である。ルターはつねにさまざまな希望、不安、理想を映す鏡であり、ドイツ人の自己像だったのである²¹⁾。五百年にわたってドイツの歴史と文化、政治と社会、思想と情念がルターという人物に投射されてきたことを短くまとめた文章である。ヴァルトブルクの展示会はルターの敵対者やユダヤ人の問題もとりあげていたが、それらの扱いは大きくはなかった。良くも悪くも強調されているのはナショナルヒーローとしてのルター像である。古城を照らすライトアップやプロジェクションマッピングは現代的で幻想的であったが、そこに映し出されていたのはドイツをドイツたらしめた偉大なドイツ人の古いイメージであった(写真3)。

(2) ヴイッテンベルク

ヴイッテンベルクの特別展「九五の宝と九五人のひとびと」の内容は、宗教改革に関係する九五の貴重品と九五人の著名人(一六世紀から二一世紀まで)のパネル展示である。後者は現代的な展示技術を駆使し、絵画、写真、音声、映像資料を組み合わせたものであった。会場はルターハウス(元アウグスティヌス隠修士会の建物)である。特別展の「宝」のなかでもっとも注目されるのは、「九五箇条」の掲出に関するゲオルク・レーラーのメモ書きのあるルター聖書(一五四〇年版)である。これは一五一七年一〇月三一日に起きた「世界的事件」の動かぬ証拠として近年話題になったものである。このメモについてはすでにヴァイマル版ルター全集(一八八三年のルター誕生四百年を記念して編集が開始された)の注に言及があるものの注目度は低く、現物を参照する学者はいなかったのだが、二〇〇六年にマルティン・トロイという研究者がイエーナでこれを再発見して新たな論争に火をつけた。レーラーはルターの出版物の編集を引き受けていた人で、ヴイッテンベルクのマリエン教会の執事であった。メモ書きを訳せば次のとおりである。「一五一七年の諸聖人の日の前日、贖宥状に関するテーゼがヴイッテンベルクの諸教会の扉に掲出された。

これはマルティン・ルター博士による³²⁾。二〇一七年の五百周年企画の主催者たちはトロイ説を採用し、掲出の事実性を否定した一九六〇年代のイザロー説に対抗しようとした。レーラーもメランヒトンと同じく目撃者ではないのだが、ルター派教会は彼のメモを新証拠とみなして特別展に現物を出展、ハンマーを三つのナショナルエグジビション共通のシンボルマークにした。

トーマス・カウフマンのような有力な宗教改革研究者もトロイ説に近い立場をとっている³³⁾。しかしフォルカー・レッピンのようにレーラーメモの価値を認めず、これを「机上の創作」と呼ぶ学者（ルター派）もいる。「九五箇条」はヴィッテンベルクの複数の教会の扉に貼りだされたとレーラーは記しているが、これは彼がヴィッテンベルク大学の学則を確かめ、討論資料の通常の掲示方法と矛盾しないようにメモを書いた結果であるとレッピンは指摘している。たしかにこうした掲示を出す役割は、一九世紀のいくつかの絵画にも描かれているように、大学専属の用務係にある。ところで当のレーラーは、けっきょくルター派教会の実力者メランヒトンの見解にあわせ、ルターは城教会の扉だけに「九五箇条」を貼りつけたという説明に切り替え、メモの内容を事実上修正したともレッピンは主張している³⁴⁾。つまりところハンマーを手にしたルターの姿は、目撃者のいない伝説ないし創作だというのがレッピン説である。それでも伝説に基づいた芸術作品や歴史物語は一人歩きしつづけている。舞台芸術や映画の影響も大きい。二〇〇三年の米独合作映画『ルター』は、二一世紀人に伝統的なルター像をあらためて浸透させる役割を果たし、同年にドイツの公共放送ZDFが視聴者に「もともと偉大なドイツ人」はだれかというアンケートを行ったところ、アデナウアーに次いでルターが第二位となった³⁵⁾。ルターはバッハやゲーテ、ビスマルクやマルクスを凌駕したのである。二〇一七年の宗教改革五百周年の諸企画は「偉人」としてのルター像を補強しなおすことになった。ところでヴァルトブルクの立体ポスターは無名のドイツ人たちに囲まれた巨人ルターを表現したものであり、その右手にはしっかりとハンマー

が握られていた（写真4）。

「九五の宝」は「九五箇条」を意識した数合わせであり、小型の土器や青銅器、装飾品、家具、彫像なども含むため、展示スペースはそれほど広くなかった。充実していたのはむしろ「九五人のひとびと」のコーナーである。九五人の人選は複数の学芸員や研究者が分担して行ったものだが、それらは多様性に富んでいる。ただし共通点もある。選ばれたのは思想の継承などの面でルターと密接に関係があるか、歴史上の役割においてルターと比較しうる人物である。そのなかから代表的と思われる人物を何人かとりあげ、特別展公式カタログの解説に従い、なぜ選ばれたか、その理由を短く記しておく⁽³⁶⁾。

ドイツ皇帝ヴェルヘルム二世

ルター誕生四百周年の一八八三年、ヴァイッテンベルク城教会の修築事業を開始し、宗教改革三七五年目の一八九二年に献堂式を挙行。君主が守護するプロテスタント教会の威光を再確認した。彼はカトリック教徒にも官職を与え、ドイツの国民的統合を推し進めた。城教会の修築にはカトリック教徒からも寄附がよせられた。

マーティン・ルーサー・キング



写真4 ハンマーを持つルター。ヴァルトブルク城の立体ポスター（筆者撮影）

一九六六年七月一〇日、黒人と白人の権利の平等を求め、シカゴ市庁舎の扉に——マルティン・ルターを意識して——箇条書を貼りだした。「アダムの墮罪後の人間は——みな平等に——福音によってのみ神の似姿を回復できる」との言葉をルターの『創世記注解』から引いた遺稿がある。

ジャマール・ディーン・アフガニー

イラン生まれのイスラーム改革者。一九世紀後半、反欧米・反帝国主義・イスラーム社会の近代化・迷信の排除・教育の充実・立憲政体の実現を訴えた。イスラームのリフォーマーとしてルターと比べられることがある。

ディートリヒ・ボン・ヘッファー

ルターの「良心」の思想に従い、ナチズムに反対した神学者。一九四五年四月九日にフロッセンビュルク強制収容所で絞首刑に処せられた。

ユリウス・シュトライヒャー

ナチスの政治家（ジャーナリスト）。ホロコーストの扇動者としてニュルンベルク裁判で死刑判決を受けた。裁判で次のように発言した。「反ユダヤ主義的言説は数世紀にわたってドイツに存在する。たとえば私から没収されたマルティン・ルター博士の本がそうだ。彼はもし生きていれば私と同じ被告席に座ったであろう」と。

北森嘉蔵

日本のルター派神学者。原爆投下の衝撃のなかで『神の痛みの神学』を発表（一九四六年）。ルターの「十字架の神学」に着想を得ている。北森の著書はドイツ語や英語にも訳され、高い評価を得た。宗教改革思想のグローバルな展開例である。

エドワード・スノーデン

アメリカの政府機関による国民の監視と情報収集の不当性を告発した元NSA局員。逮捕状が出て亡命中だが、ドイツではルターと同じように良心に従って巨大組織に抵抗したとの評価がある。

サイード・アフマド・カーン

インド（ムガル帝国）のイスラーム思想家。ルター神学を採り入れて「信仰のみ」による救済を説いた。イギリス支配を受け入れ、イスラームの近代化を唱えた。

ヨージェフ・ラッツィンガー（ベネディクト一六世）

二〇一〇年、教皇としてはじめてローマでルター派と合同礼拝を行った。そもそもアウグスティヌスの研究で学位を取得しており、そのなかで「アウクスブルク信仰告白」の恩寵論を評価している。エキュメニズムの推進者であり、ドイツから出た教皇として歴史的な役割を果たしたといえる（なおルター派との対話は第二ヴァチカン公会議以後着実に進んでおり、二〇一六年の宗教改革記念日には教皇フランシスコがスウェーデンのルンドでルター派との合同礼拝に出席した。二〇二七年のヴィッテンベルクの宗教改革記念礼拝にもカトリックの代表者たちが招かれ、城教会の記念礼拝ではドイツ人枢機卿ラインハルト・マルクスが挨拶、マリエン教会では司教ゲアハルト・ファイエが説教を行った）。

ジョン・ウー

香港の映画監督。中国革命の混乱期に香港に亡命。父母とともに極貧生活を送る。ルター派のアメリカ人夫妻に助けられ、彼らの支援でミッシェルスクールに通った。一時は宣教師を志すほどの信仰の持ち主。彼の映画は暴力と絶望の世界を描いているが、そこには隣人愛、平和、無償の恩寵、そして救済のメッセージが隠されている。

九五人の人選にはいくつかの傾向がある。ルターの同時代人、神学者、芸術家、王侯貴族を別にすれば、ナシヨナリズム・国民統合・全体主義に関係する人物、個人の良心の自由をつらぬいた人物、非ヨーロッパ世界でルター主義を實踐し、ヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界のあいだの思想的往還を實現した人物、他宗教の改革ないし近代化運動に身を捧げた人物、エキユメニズムを推進した人物が選ばれているのである。これらの人物像は互いに矛盾する場合もあるが、それは宗教改革以後五百年の歴史そのものの矛盾や動揺を映し出している。

ヴィッテンベルクの特別展には、ヴァルトブルクのそれのようにドイツ(人)の誇りと名誉を意識的に擁護するような姿勢はみられなかった。「改革」や「近代」への西欧的な執着ないし優越意識を感じさせる展示もあったが、企画者たちの視野はけっして狭くはない。フォルカー・レッピンやハインツ・シリリングなど、ドイツを代表する宗教改革史家を監修者に迎え、新しい研究動向にも配慮していた。なにより全体主義と教会の不幸な結合の問題にも正面から向きあっていた。ただしこのテーマについては、ベルリンの旧SS本部跡地にあるテロのトポグラフィー館を会場とする「国民社会主義におけるマルティン・ルター」という企画展を質的量的に超えるものはない(写真5)。こ



写真5 ベルリンのテロのトポグラフィー館の企画展「国民社会主義におけるマルティン・ルター」(筆者撮影)

の企画展ではナチスとルター派教会指導者たちの「結託」を示す大量の写真資料や文書が展示されていた。この種の展示会が宗教改革五百周年の年に催されると予想していた人は多くはなかったであろう。この企画には戦後ドイツの「過去の克服」の精神が息づいており、図録にはマンフレート・ガイルスやオラーフ・ブラシユケなど、第一線の現代史家が詳しい解説文を寄せている。⁽³⁸⁾

(3) ベルリン

首都ベルリンでの特別展は、「ルターエフェクト——世界のプロテスタンティズムの五百年」と題し、マルティン・グロピウスバウで催された。その特徴は、タイトルのとおり宗教改革以後のプロテスタント教会の歩みをヨーロッパ規模で、またグローバルな視野でとらえようとする視点である。近年、英米やドイツの研究者たちが宗教改革の複数の潮流を意識して「諸宗教改革 Reformationen/Reformations」という表現を用いていることを踏まえ、この用語を採用してルター派だけでなく改革派、イギリス国教会、さらにはカトリック改革の動きにも目を配り、再洗礼派その他の急進派（少数派）にも目を向けていた。この傾向はヴァルトブルクとヴィッテンベルクの特別展でも確認できるが、多様性を重視する姿勢はベルリンの企画がもつとも強い。展示物には一五二七年にスイスとドイツの境に位置する村（シャフハウゼンのシュライトハイム）で編まれたスイス系再洗礼派の信仰告白の古い印刷本が含まれていた。スイス系再洗礼派は教会と国家権力の癒着を許さず、幼児洗礼によって人をキリスト教社会に自動的に組み入れる体制に異議を唱え、自覚的信仰を前提とした聖書的な成人洗礼を求めた。その結社原理は当時の社会秩序、政治秩序とは相容れなかった。なおベルリンの特別展にはスイス系再洗礼派とは別の流れに属するミュンスター再洗礼派王国に関連する展示物もあった。それは指導者ヤン・ファン・レイデンの肖像をレリーフにしたストーブタイルである。小



写真6 ヴァルトブルク城の南塔。再洗礼派フリッツ・エルベを収監した牢獄（筆者撮影）

さな作品だが、丹念にデザインされている。宗教改革の傍流として無視されがちな急進派のあいだにも彼らなりの記憶と記念の文化があったことに気づかせてくれる貴重な遺物である。なおルターにとって再洗礼派は死刑にすべき反乱者であり、ザクセン選帝侯も同じ立場をとっていた。ヴァルトブルク城にはフリッツ・エルベという名の再洗礼派信徒を閉じ込めた牢獄が残っている（写真6）。エルベはザクセン選帝侯とヘッセン方伯の支配権が交錯する地域で一五三三年に逮捕されたが、斬首刑を求める選帝侯（ヨハン・フリードリヒ）と宗教上の理由による死刑を認めない方伯（フィリップ寛大侯）の対立ゆえに刑罰の確定をみないまま一五四八年に獄死した。³⁹これは宗教改革時代の為政者たちの寛容と不寛容をめぐる問題を検討するうえで貴重な事例である。ともあれ、宗教改革五百周年の諸企画は、宗教改革の敵たち、異分子たちの記憶を呼び起こす姿勢を示している点で注目される。⁴⁰

ベルリンの特別展では、いくつかの企画展示室が設けられていた。ルター派の強国スウェーデンをテーマとした部屋は、国王と貴族によるルター主義の受容、教会体制の整備、聖書翻訳などを扱うだけでなく、サーミの伝統文化の残存の問題もとりあげていた。そこには民衆

史（先住民史）を重視する姿勢が表れていた。北アメリカをテーマとする部屋もあった。イギリスのクエーカーとかならんでドイツ系移民の多かったペンシルヴァニア州がとくに重視されており、信仰の自由を求めたメノナイト、アーミッシュ、ブレザレン（ジャーマン・バプティスト／ダンカーズ）、シユヴェンクフェルダー、ボヘミア兄弟団、生活の向上を求めたルター派、改革派などの大西洋横断の旅と入植地での教会生活、日常生活に光をあてていた。北米におけるドイツ語・ドイツ文化の保存、先住民や黒人との関係にも意を払っていた。韓国のプロテスタント教を扱う部屋もあった。韓半島の伝統文化とキリスト教の融合の諸相、市民的抵抗の砦として機能したプロテスタント教会の今昔、現在のペンテコステ派のメガチャーチの成長ぶりなどに注目するもので、現代の東アジアで隆盛するプロテスタントイズムの実例をヨーロッパ人（ドイツ人）に理解させる機会を提供していた。アフリカのキリスト教をテーマにする部屋も設けられていた。具体的には、かつてドイツの植民地であったタンザニアのプロテスタント教会が主題であり、ドイツ人による伝道、近代化の促進、医療や教育の充実のための活動の軌跡が豊富な映像資料とともに紹介されていた。現地の村落共同体の連帯（ウジャマー）の精神の継承や伝統的祝祭文化の保存など、民衆史的・民俗学的な視点も採り入れられていた。¹¹

北米、アジア、アフリカへのキリスト教の広がりテーマにする場合、そこには欧米や日本の帝国主義的侵略と植民地支配の実態、先住民に対する加害の事実を直視する姿勢が必要であるが、ベルリンの特別展はその点が不十分であったといわざるをえない。それでも、公式図録の結びの言葉は傾聴に価する。「預言、癒し、指導者一家のカリスマ性を特徴とするコンゴのキンバング教会にみられるように、非ヨーロッパに伝わったプロテスタントイズムは土着化し、変容を遂げている。西洋的な基準で『正統』と『異端』の線引きをすることははやできない。必要なのは宗教（宗派）間のグローバルな対話だけである。それは宗教改革本来の精神である」。これは歴史家ヴォルフガング・

ラインハルトが書いた文章である。「宗教改革本来の精神」が宗教間の「対話」だという説明を額面どおりに受け入れるのは難しいが、ルターがカトリックの論客やザクセン以外の宗教改革者たちとしばしば討論を行い、「公正で自由な公会議」の開催も求めていたのは事実である。¹⁴⁾

現在、宗教改革研究者の多くがグローバルヒストリーを意識して単著や論文を書いている。しかし、多くの論者の主張は西洋中心主義を抜け出せていない。宗教改革は「近代化」の最初の推進力であり、その教説ないし精神は「西洋文明」とともに「非ヨーロッパ世界」に波及したというグラントナラティヴの影響力はいまだに強い。そうした状況のなかで、上述のラインハルトの主張は先進的な部類に属する。¹⁵⁾

ルターの敵対者たちや各種の宗教的マイノリティに注目し、再評価を行う傾向について補足すれば、トーマス・ミュンツァーの拠点であったテューリンゲンのミュールハウゼンでは、農民戦争博物館において特別展「ルターの愛される兄弟たち」が催されていた。企画者たちはエンゲルス以来の社会主義者たちによるドイツ農民戦争研究、旧東独におけるミュンツァーの英雄化を回顧し、現在の国際ミュンツァー研究協会による地道な調査活動の継続状況も紹介している。なお旧東独時代、この都市の古い市門のすぐそばに据えられたミュンツァーの石像は（二〇一七年一〇月の時点では）工事現場の金網のなかに薄汚れた姿で立っており、かつての威光は完全に失われていた。しかし、歴史画家ヴィルヘルム・ピットハンがミュンツァーと農民戦争を主題として一九五〇年代に描いた迫力満点の大作は旧市庁舎の壁を飾っており、一六世紀の遠い過去と二〇世紀の近い過去の両方を記念しつづけていた。いくらルターがミュンツァーを「熱狂主義者」扱いたからといって、この都市の人たちはルターに追従する姿勢をとっていない。いずれにせよ、ルターとミュンツァーの思想が終末論や悪魔観の面では同じ中世的起源にさかのぼることを強調する新しい研究もあるから、正統と異端、正と邪の古い枠組みを残したルター中心主義的な宗教改革史像は相対化する必要が

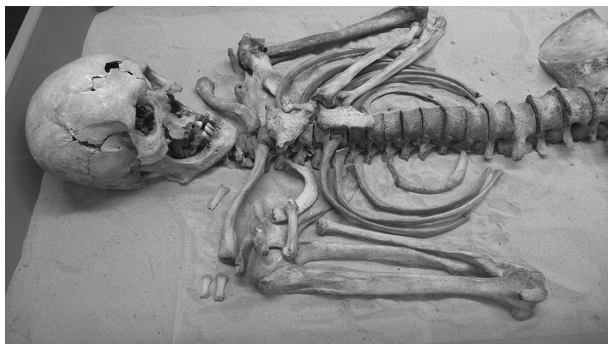


写真7 ミュールハウゼンの農民戦争博物館特別展「ルターの愛されざる兄弟たち」。再洗礼派フリッツ・エルベの遺骨（筆者撮影）

ある。⁴⁴ところで、ミュールハウゼンの展示物のなかで訪問者に衝撃を与えたのは、ヴァルトブルク城で獄死した再洗礼派フリッツ・エルベの遺骨と考えられる人骨である（写真7）。これは当時の史料から判明した埋葬場所で二〇〇六年に発掘されたものである。⁴⁵

ラインラント・ファルツ州のツヴァイブリュッケンとカイザースラウテルンで開かれた企画展「新しい天と地——ファルツの宗教改革」も少数派に目を向けており、丹念なパネル展示が印象的であった。ファルツは一七世紀に選帝侯たちや地方領主が農業労働力の確保の目的もあって再洗礼派に寛容な政策をとり、スイス系やアルザス系の再洗礼派の集住地が数多く生まれた場所である（そこから北米に渡った再洗礼派も多い）。他方、ノルトライン・ヴェストファーレン州のエッセンにあるルール博物館の「分かたれた天国——宗教改革とライン・ルール地域の宗教的多様性」という特別展は、一六世紀の宗教改革とその後の「多宗派化」の時代から現代までのユダヤ教徒、イスラーム教徒、仏教徒、ヒンドゥー教徒その他のコミュニティ形成を追う大がかりな企画であり、分裂と多様化、小グループの叢生、寛容な空間を求める新たな少数派の到来という五百年の歴史をふりかえる企てとして三つのナショナルエグジビションをはるかに超える視野をもつものであった。⁴⁶

最後になったが、ドイツ宗教改革五百年の諸企画に反対し、裸のルターの巨大なプラスチック像を野外に据えつけて「宗教に公費を使うな」と呼びかける団体があったことに触れておきたい。それはジョルダノ・ブルーノ協会という教会批判団体で、彼らが製作したルター像の黒いマントの背面にはユダヤ人に関するルターの差別的発言が白い字で列記され、「ルターの裸の真実」と名づけられていた。醜悪な「展示物」だが、二〇一七年一〇月三十一日にヴィッテンベルクを訪れ、目抜き通りにそそり立つこの巨像を眺めたドイツ人にとっては、国家教会時代の「教会税」が残り、聖職者の給与、教会の修築、各種の行事の予算が賄われている現状を批判的に問いなおす機会になったかもしれない。なおこの裸のルター像はスイスにも持ち込まれ、かつてツヴェイングリが改革事業を展開したチューリヒのグロースミュンスター大聖堂を見上げる歩道に「設置」された。スイス諸州も教会税を残しているからであろう。

おわりに

二〇一七年のドイツにおける宗教改革五百周年記念の諸行事は、三つのナシヨナルエグジビションにみられるように、一九世紀の歴史主義やロマン主義の思潮に養われた英雄礼賛とナシヨナリズムを受け継ぎ、信仰と祖国のためにハンマーをふるった偉大なドイツ人としてのルターを巨額の公費を投じて顕彰するものであった。その一方、各地の展示企画のなかには、「ヨーロッパ」と「世界」に視野を拡大し、敵対者（異分子）を排除する姿勢を改め、彼らの存在を再評価し、記憶にとどめようとする新しい意識を反映するものもあった。また民衆世界に目を配り、宗派間・宗教間の対話を重視する企画もあった。成功とはいえないが、ヨーロッパ中心主義を克服しようとする展示企画もみられた。宗教改革から五百年後のドイツ社会には古い観念と新しい発想が同居しており、研究者の世界も百家争鳴

の状態である。

今後の研究の課題は、第一に、一九世紀的な「国家」の枠組を相対化し、ヨーロッパ的視野の宗教改革像をあらたにつくることであろう。ルター時代のドイツは一九世紀のドイツとは異なっており、そもそもルターはドイツ人だけを見つめていたわけではない。ルターが非ドイツ語圏の思想からどのような影響を受け、それをドイツとドイツ以外の世界にどのように媒介したかが問われねばならない。早期の宗教改革に関する個別研究はすでに豊富に存在し、ウィクリフやフスの重要性はつとに知られている。しかしそれらの研究成果がドイツ人によるドイツ宗教改革史の研究に有機的に統合されているかどうかは不確かである。ルター思想の何が革新的なのか、同じ信仰は歴史上どこにも存在しなかったのか、中世史家との協働による研究の深化が望まれる。一方、ルターおよびルター派世界における人文主義の行方を探ることも、巨視的な視野での宗教改革史の考察には欠かせないであろう。この問題を考えるさいには、やはりルターとメランヒトンの比較が有益である。ある面でメランヒトンはルターが破壊したものを修復する役割を担っていたと考えられるからである。¹⁷⁾

第二の課題は、異宗派・異端者・異宗教の信奉者との衝突、交渉、共存の諸相をドイツ・ヨーロッパ・非ヨーロッパに関して総合的に研究し、ルター思想・宗教改革思想の可能性と限界を明らかにすることであろう。なおプロテスタントたちがいつごろ「正統と異端」の中世的二分法を抜け出したか、そしてまた啓蒙期の新しい偏見である「文明と野蛮」の二分法をいつ克服したかを調べることは、異教の民や未開の民に対する蔑視、一方的な憐憫、そして暴力による強制や殺戮を許容する心性の克服の歴史（ないしはこれを克服できない呪縛の歴史）をたどることもある。この問題を深く検討しないままに海外伝道の歴史をいくら研究しても、ヨーロッパ中心主義を超える新しいグローバルヒストリーは描けない。せいぜい古い「ヨーロッパの拡大」の歴史をなぞるにとどまる。なお筆者は、二〇一七年

にヴィッテンベルクで開かれた宗教改革五百周年記念の学術会議で報告を行い、欧米の再洗礼派と日本のキリシタンを例に潜伏キリスト教徒の信仰と習俗の東西比較を試みた。そのさい筆者は、従来の神学研究や教会政治史の担い手たちがヨーロッパのキリスト教をほとんどアブリオリに高度かつ純粹なものと措定してアジアに伝わったキリスト教の土俗性・迷信性を指摘する一方、近世ヨーロッパのキリスト教世界の土俗と迷信の地下水脈には関心を示してこなかったことを批判し、宗教改革史の研究は習俗ないし民衆文化の研究を伴っていなければ不完全なものにとどまると主張した⁽⁴⁸⁾。一九世紀になっても多くのドイツ人がルターの遺品（たとえばベッドや机の断片）を求め、それらを箱や包みのなかに護符として収め、保管していた事実は、一部の民俗学者や地方史家以外にはほとんど知られていない。北米に渡ったドイツのルター派牧師のなかには、護符や呪文、手かざしで病人を癒したり、狂犬をおとなしくさせた術を使う人たちがいた。それはドイツの教会史が封印してきた事象にほかならない⁽⁴⁹⁾。本稿で詳述した三つのナショナルエグジビションは、中世段階のヨーロッパ、北欧のサーミの世界、アジアやアフリカ、北アメリカの先住民社会や黒人社会についてはキリスト教と土着的文化の関係を問うているが、宗教改革後のドイツの民衆文化（多くの在地聖職者層にも共通する基層文化）をクローズアップする視点をもたない。まるでそうした世界は存在しなかったかのようなのである。

第三の課題は、宗教改革の始まりに関する議論の深化である。この作業は困難だが、生産的な議論につながるものと考えられる。エリック・サークによれば、「九五箇条」段階のルターは「ドイツ化 turning German」の度合いを強めつつ、いまだカトリック聖職者として「中世後期の宗教改革」を行っており、その失敗が決定的になったあとに「プロテスタントの宗教改革」を開始したのであった。その画期はルターが僧衣を脱いだ一五二四年である⁽⁵⁰⁾。サークの議論は示唆的であり、リフォメーションの概念をカトリック的改革とも重ね合わせる点に特色がある。なおルター

は「プロテスタントの宗教改革」に移行してからも、カトリック的伝統のすべてを棄てたわけではない。彼以上に激しく中世的伝統（聖書にもとづかない聖画像や幼児洗礼の慣行）を否定した改革グループも存在した。カトリックと思想面・制度面で近いままのプロテスタントもいた。なおオランダのアルミニウス主義者たちは、ルターが育ててカールヴァンが受け継いだ恩寵論の立場からみれば異端的であるが、彼らはけっしてカトリックではない。こう考えると日本語の「宗教改革」は適切な訳ではないかもしれない。そもそも「宗教改革」は、わが国では古代エジプトのアメン・ホテプ四世のそのように、ある宗教からまったく別の宗教に断固として移行することを意味する。しかし近世ヨーロッパの改革は、キリスト教から別の宗教への移行をもたらしたわけではない。非キリスト教的な宗教を廃絶してキリスト教を復活させたわけでもない。そこで筆者は、カトリック改革もプロテスタント改革も含む Reformatio の概念を「キリスト教（諸）改革」ととらえ、そのように翻訳することを提唱したいと考えている。そうすることによってわれわれは、ルターを宗教改革の標準型ないし正統と位置づける狭い見方を修正し、交差・重層・変動の相のもとに宗教改革（キリスト教改革）の歴史をとらえることができ、その「始まり」についても複数の源泉を想定し、それらの流れが合わさって怒濤となり、また支流に流れ込むような新しいイメージを創出することができるのではないだろうか。そのときにはじめて、ハンマーをもった一六世紀のひとりのドイツ人を宗教改革の「元祖」とするような、劇画的に創られた宗教改革像を修正することができるかもしれない。

註

(一) Cf. *Jubilaeum Academiae Argentoratensis sive Acta Secularis Gaudii: Quod In Honorem Aeterni Patris Iunium & omne domum perfectum e supernis descendit, & Gratiam Memoriam restitutae Evangelii Lucis, Argentoratensis Academia devota*

- pidate celebrant*, Argentrat 1617.
- (2) Thomas A. Brady, *Emergence and Consolidation of Protestantism in the Holy Roman Empire to 1600*, in: R. Po-chia Hsia (ed.), *The Cambridge History of Christianity 6: Reform and Expansion 1500-1660*, Cambridge, 2007, 24f.
 - (3) Peter Marshall 1517: *Martin Luther and the Invention of the Reformation*, Oxford, 2017 [以下 Marshall, *Luther* Δ略す], 82-86, 96-100. 宗教改革百周年のころのドイツについては高津秀之「一六一七年のドイツ——宗教改革から一〇〇年」『踊共二編』『記憶と忘却のドイツ宗教改革——語りなおす歴史一五二七-二〇一七年』(マネルヴァ書房, 二〇一七年), 第七章に詳しく。
 - (4) *Sculptura Historiarum Et Temporum Memoratrix: Oler Nütz und Lustbringende Gedächtnis Kunst der Merckwürdigsten Welgeschichten aller Zeiten von Erschaffung der Welt bis auf das gegenwärtige 1697*, hg. von Georg Andreas Schmidt, Christoph Weigel et al., Nürnberg 1697, Millenarij à Christo nato II. Seculum VI.
 - (5) Marshall, *Luther*, 95-111.
 - (6) 菅野瑞治也『プロミンションヤフト成立史』(春風社, 二〇二二年), 二二二頁。
 - (7) *Wirtschaftsbetriebe Wartburg GMBH (Hg.), Luther und die Deutschen. Kurzer Führer durch die Nationale Sonderausstellung auf der Wartburg*, Eisenach 2017 [以下 *Luther und die Deutschen* Δ略す], 48.
 - (8) ルター『宗教改革三大文書——付「九五箇条の提題」』深井智朗訳(『講談社学術文庫』二〇一七年), 一三二-四四(訳文), 四二二-四二四頁(訳者解説)。
 - (9) 近藤勝彦「世界史の中の宗教改革」, 日本キリスト教文化協会編『宗教改革の現代的意義』(教文館, 二〇一八年), 一六四頁を参照。
 - (10) Harriet Beecher Stowe, *Sunny Memories of Foreign Lands*, vol. 2, Boston & New York, 1854, 361-366.
 - (11) Marshall, *Luther*, 132-135.
 - (12) Barry Stephenson, *Performing the Reformation. Public Ritual in the City of Luther*, Oxford University Press, 2010, 90-92, 186-188. Vgl. Hans-Ernst Mitting, *Denkmäler im 19. Jahrhundert. Deutung und Kritik*, München 1972, 205. Jochen Birkenmeier, *Luthers letzter Wille. Ein Rundgang durch Luthers Sterbehaus*, Potsdam, 2013, 9-16, 49-65.
 - (13) ランケ「宗教改革時代のドイツ史」, 林健太郎責任編集『ランケ』(中央公論社, 一九八〇年), 四〇七-四五六頁。
 - (14) Marshall, *Luther*, 138f.
 - (15) 踊共二「日本の宗教改革史研究——過去・現在・未来」『史苑』一九四号(二〇一五年), 一五六-一五八頁を見よ。
 - (16) ランケ, 前掲書, 四七六頁。
 - (17) Stephenson, *op. cit.*, 92f; Silvio Reichelt, *Der Erlebnisraum Lutherstadt Wittenberg. Genese, Entwicklung und Bestand eines protes-*

- kantischen Erinnerungsortes*, Göttingen 2013, 30-32.
- (18) Paul Althaus, *Luther und das Deutschtum*, Leipzig 1917, 3-5.
- (19) Marshall, *Luther*, 169.
- (20) Hans von Schubert, *Luther und seine lieben Deutschen. Eine Volksschrift zur Reformationsfeier*, Stuttgart 1917, 157.
- (21) Christoph Nibel, *Die Mobilisierung der Kriegsgesellschaft. Propaganda und Alltag im Ersten Weltkrieg in Münster*, Münster in Westfalen 2008, 63.
- (22) ヒトラー時代の教会については、ナチスに抵抗した教会人がいたことも含め、宮田光男「ルターはヒトラーの先駆者だったか——宗教改革論集」(新教出版社、二〇一八年)の終章を参照。
- (23) Hartmut Lehmann, *Luthergedächtnis 1817 bis 2017*, Göttingen 2012, 281-296. 踊共二「宗教改革五百年をふりかえって——記念日の歴史学」『歴史と地理——世界史の研究』七十六号(山川出版社、二〇一八年)の六一〜六四頁も参照。
- (24) Volker Leppin, Die Monumentalisierung Luthers. Warum vom Thesenanschlag erzählt wurde, und was davon zu erzählen ist, in: Joachim Ott und Martin Treu (Hg.), *Luthers Thesenanschlag. Fiktion und Fiktion*, Leipzig 2008, 59-67.
- (25) 專業数は「ルターの二〇年」事務局の発表による。予算については中部エーッ放送MRDの報道による。https://www.mdr.de/reformation500/reformationsjubilaeum-wirtschaftsreifahr-100.html
- (26) https://www.luther2017.de/neuigkeiten/rund-600-000-besucher-bei-den-nationalen-sonderausstellungen/
- (27) *Luther und die Deutschen*, 25f.
- (28) Volker Plagemann, *Vaterstadt, Vaterland, schütz Dich Gott mit starker Hand. Denkmäler in Hamburg*, Hamburg 1986, 112.
- (29) 菅野、前掲書、二六〇頁。
- (30) Volker Leppin, "Nicht seine Person, sondern die Wahrheit zu verteidigen." Die Legende vom "Thesenanschlag in lutherischer Historiographie und Memoria, in: Heinz Schilling (Hg.), *Der Reformator Martin Luther 2017*, München 2014, 100f. *Luther und die Deutschen*, 29.
- (31) *Luther und die Deutschen*, 73.
- (32) Stiftung Luthergedenkstätten in Sachsen-Anhalt (Hg.), *Luther: 95 Schätze - 95 Menschen*, Wittenberg 2017 [2017]. *95 Schätze - 95 Menschen* [2017], 88f. Vgl. Martin Treu, Urkunde und Reflexion. Wiederentdeckung eines Belegs von Luthers Thesenanschlag, in: Joachim Ott und Martin Treu (Hg.), *a. a. O.*, 59-67.
- (33) Thomas Kaufmann, *Geschichte der Reformation in Deutschland*, Berlin 2016, 182f.

- (34) Volker Lepin, Geburtswelten und Geburt einer Legende. Zu Rürers Notiz vom Thesenanschlag in: *Luther* 78 (2007), 145-150.
- (35) <http://www.zdf-jahrbuch.de/2003/programmarbeit/arens.htm>
- (36) 95 *Schätze - 95 Menschen*, 308f., 314f., 388f., 430f., 478, 504f., 540f., 550f., 574f., 576, 九五人のなかにはルターの同時代人たち、君主、神学者、哲学者、文学者、芸術家などが洋の東西を問わず含まれているが、ここでは紙幅の制約もあるため特別展の性格が濃厚に表れていると考えられる人物をとりあげた。
- (37) 踊共二「宗派化と世俗化の歴史解釈——ヨーロッパ史からクローバルヒストリーへ」『東欧史研究』四〇号（二〇一八年）、九七—一〇八頁を参照。この論考は、宗教改革、宗教改革後の多宗派化、西欧の宗教勢力の海外進出、他宗派・他宗教との邂逅、相互作用に関する今世紀の諸研究を整理し、東欧やユダヤ教世界、イスラーム世界の動向にも目を向けながら、歴史解釈の方法論について考察したものである。
- (38) Stiftung Topographie des Terrors. Gedenkstätte Deutscher Widerstand und Ulrich Prehn (Bearb.), *Überall Luthers Worte. Martin Luther in Nationalsozialismus*. Berlin 2017.
- (39) Peter Matheson, Christianity from below, in: P. Matheson (ed.), *Reforming Christianity*. Minneapolis, Minnesota, 1f.
- (40) Deutsches Historisches Museum (Hg.), *Der Luther Effekt. 500 Jahre Protestantismus in der Welt*. Berlin 2017 [以下「*Der Luther Effekt*」と略す]、12-73.
- (41) *Der Luther Effekt*, 76-389, 401.
- (42) ルター、前掲『宗教改革三大文書』「五三三、六七—七七一、九三頁を参照。
- (43) ラインハルトは宗教改革研究の国際誌でも同じ主張を展開している。Wolfgang Reinhard, *Dialektik christlicher Weltwirkung*, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 108 (2017), 223-233.
- (44) Peter Matheson, Luther's Reformation and that of the Radicals, in: *Mennonite Quarterly Review* 90 (2018), 33-46.
- (45) <https://www.mdr.de/kultur/themen/luthers-ungeliebte-brueder-ref-jahr-100.html>
- (46) Heinrich Theodor Grüter, Magdalena Drexl, Axel Heimsoth, Reinhold Stephan-Maaser (Hg.), *Der geteilte Himmel. Reformation und religiöse Vielfalt an Rhein und Ruhr*. Essen 2017.
- (47) 菱刈晃夫『メラニトンの人間学と教育思想——研究と翻訳』(成文堂、二〇一八年)「第一〜四章を参照」。
- (48) 筆者の報告内容は Karla Boersma & Herman J. Selderhuis (eds), *More than Luther. The Reformation and the Rise of Pluralism in Europe*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 2019 (in preparation) ； The European Reformation and the Christian Minority in Early Modern Japan ； ユニバーサルとローカルを掲載予定。

- (49) Patrick J. Domboyer, *Powwowing in Pennsylvania. Braucherei & the Ritual of Everyday Life*, Kutztown, Pennsylvania, 2017, 39–42.
- (50) Eric Leland Saak, *Luther and the Reformation of the Later Middle Ages*, Cambridge University Press, 2017, 292f., 349–275.

※本稿はJSPS科研費JP16K03132の研究成果の一部である。